

「中学生の部」

(銀賞)

〔ありがとう自転車〕

森下 鈴音

滋賀県高島市立安曇川中学校二年

母と私は土曜日にもサイクリングをしながらゴミ拾いをします。始めたきつかけは、私が中学一年の時にあります。春の桜が満開だった頃母はいつものように「それじゃー行ってくるね。」と朝食をとっていた父と私に言って出かけようとなりました。その時に私は母がいつも健康のためにサイクリングをしているのは知っていました。そのど桜をみたかったりで私は母についていくことにしました。

家を出て坂を下りていくとずっと桜の並木道がつづいています。「きれいだねえ」と母と私はうっとりとして桜の花びらがひらひらと散っていくのを眺めながら、春の少し肌寒い風を全身に受けて自転車をこいでいました。そして、この日は改めて母がたぐさんの輝きに満ちていたことを知ったのです。

桜を眺めているとどうしても気になってしまうのはたぐさんのゴミなのです。特にその日はお花見をしに来た人達が置いていったと思われるペットボトルや空の弁当箱が目立ちました。「汚いなあ」とか私は思っているとなんと母は自転車のかごに積んであった大きな袋に空き缶やペットボトルなどのゴミを見つけた度に自転車を止めてひよいひよいと袋に入れていくのです。「お母さん、そんなこといつもやっているの？」呆気にとられた私はつい母に尋ねてしまいました。すると母は「あつたり前じゃない？せつかく自転車で乗ってるんだから町をきれいにしたほうがいいに決まってるでしょ。それにね、お母さん思うの、自転車は健康にいいしゴミ拾いにも役に立つ、そして春にはこんなきれいな桜が見れるじゃない。ねっ、一石三鳥だと思わないの？」。思わず私は吹き出してしまいました。「なんかおかしいこと言った？」と真剣なまなざしで母が私に向ける視線は汚れを知らない天真爛漫な輝きに満ち溢れていました。「きれいだなあ」と思わず私の口からそんな言葉が漏れていました。「えっ？桜？」母はキョトンとした顔でこちらを見つめています。「違うよ、お母さんだよ」そう私は小さな声でつぶやいた後すぐに「お母さん、これから私も一石三鳥につきあってあげるよ」恥ずかしさで赤面しながらも母を真っ直ぐに見つめながら言いました。「あんたサイクリング好きだったけ、ふふエライじゃない」と私に言ってくれた母のとびっきりの笑顔は私の頭にも今でも鮮明に焼きついています。

そして「ほらっ行くよ！」母キラキラと輝くきれいな汗を流しながら桜の花びらが舞い散る中自転車をこぎはじめました。こんな母を私は誰より誰よりも尊敬しています。そして今日もまた私は大好きな自転車と大好きなお母さんと一緒に自転車を走らせるのです。きれいなきれいなお母さんと一緒に……